

産経 health

› メタボリックシンドローム・ネット

› メタボリックシンドロームPRO

› 小児肥満ネット

› ニッポンの食、がんばれ!

産経健康倶楽部

Sankei Health Club

» [会員専用ページトップ](#)

「産経健康倶楽部」会員専用ページ

毎日の生活に役立つ情報をお届けする「産経健康倶楽部」へようこそ！
このページでは、登録された会員さまだけの注目情報を定期的に掲載します。



食がカラダを変える! *Special* 対談 **新連載**

vol.01 末期がん患者に気力と活力を吹き込んだ「漢方文化」

医食同源 ー基本は食ー

黒岩 先生にはその後も処方を受けていただき、半年後にはがんは3cmに、腫瘍マーカーは20と正常値になりました。そういう奇跡的なことが実際に起こったのです。

天野 初めてお父さんにお会いした時は、本当に痩せていてつらそうでした。それがだんだん見ていくと、「あら、お父さんハンサムだったんですね、黒岩さんよりもずっといい男！」と思うほどになりました(笑)。いつも淡々とした笑顔で、肌もつやつやで穏やかで。2年半の期間、ご一緒させていただきましたが、私自身も勉強になりました。漢方が最期に求めるのは、仙人の姿です。誰でも亡くなる前はそうあってほしいと思うのですが、まさにお父さんはそんな様子でした。

黒岩 本当に淡々として過ごしていましたね。翁(おきな)のような精神状況、その気の高さには感心します。

天野 亡くなる1~2年前には、葱白湯(そうはくとう)を使用しました。これは、医者が処方すれば薬になるのですが、お父さんには長ネギを刻んでハチミツを入れて飲んでもらいました。体を温め、病を乗り越える力を蓄えるためです。あわせて冬虫夏草のドリンク剤も飲んでいただきました。

東洋医学や漢方の処方では、その効果が表に出てくるまでに時間がかかります。速効性という点において、西洋医学の方に圧倒的に分があるのも事実ですが、病気とうまく共生し、気を保ち免疫力を高めて毎日を大事に生きてもらうために、東洋医学は必要なものを補い、そのお手伝いをします。病気を治すのではなく、少しお手伝いをするのです。そういう漢方の基本的な考え方を、お父さんに実践させてもらったのでした。死に方はQOLに通じますが、それは本人のためだけでなく、残される家族のためでもあります。

黒岩 西洋医学に対して絶望感を抱くなかで天野先生に出会い、父が元気になったのは間違いありません。父も先生に対して信頼感があったのは確かです。だから、穏やかで淡々と過ごすことができたんですね。

天野 漢方は生活の中で生まれた医学ですから、口から食べ物を入れないと効きません。基本は“食”なんです。ご飯を食べずに

毎日注射を打ってもらえれば命はつなげますが、口から食べないと元気は出ないのです。お父さんの場合も、いくらよく効くいい薬を処方しても、体が吸収しなければどうしようもありません。だから、まず胃の調子を整えたのです。長芋ががんに効くというわけではないのです。

黒岩 闘病生活の中で、一時、熱が出たことがありました。「あまり高熱が続くとせっかく高まった気が落ちてしまう」と、冬にもかかわらず天野先生はスイカを買ってきてくださり、その皮を煎じて飲んでくださいといわれましたね。スイカの皮を干したものが、解熱効果がある生薬なんだそうです。

天野 日本では猛暑でも冷房がない時代に、スイカを食べることで体を冷やしていました。昔の人の知恵です。薬は薬局で買わなくてはなりませんが、食べものなら誰でもスーパーで買えます。

黒岩 医食同源とはまさにそういうこと。すべて生活型の養生医学なんです。毎日の暮らし方や気持ちの持ちようなどを全部ひっくるめて、自然の流れのなかで淡々と生き、その方法を見つけようというのです。それが形になったとき、たとえがんを抱えていたとしても人間の体はいい方向にいくのです。



🔍 [インデックスへ戻る](#)